

舟からの目線で里を眺める

長い冬がようやく終わった。まだまだ不安定な天気は続くが、東北にもようやく春が来たという感じが日に日に濃くなる季節となった。

筆者が住む庄内町清川は最上川河畔に位置するかつての舟運の拠点。ようやく川漁がシーズンを迎えるようになり、冬の間係留されていた川舟が漁場へと向かい始めるようになった。全盛のころには及ばないとはいえ、清川周辺の川舟漁はまだまだ健在で、今も川漁師たちが春はヤツメウナギ、サクラマス、夏はアユ、秋はカニやサケなど、仕掛けを中心とした漁を営んでいる。

筆者の所属する NPO 法人里の自然文化共育研究所では、昨年木造の笹舟（地元では「石舟」とも呼ばれる）を新造し、最上川の自然環境や暮らしの文化など実体験を踏まえた調査研究を始めている。川舟の建造は流域唯一の舟大工である大石田町の木村雄一さんの手によるものである。

清川は河川改修や河床変化の影響もあって現在のところ拠点となる港が埋没した状況にあり利用できない。特に冬の舟の管理が大変で痛みもひどい。そんなこともあって4月初め修理と点検のため木村さんのところまで舟を運んだ。木村造舟所は清川から約 50 km 上流の大石田町黒滝の最上川河畔にある。筆者は雪解けで増水する最上川をゆっくりとのぼって行った。片道 5 時間半の行程である。そしてつい先日、雪の降る中をまた舟で清川まで下ってきた。下りは4時間だった。

道中舟からの目線で流域の村々を眺めるとあらためて様々な発見があった。驚きだったのは、まだまだ河畔のあちらこちらに川舟が見られる風景が広がっていることである。そして舟が係留されている川岸の上には数軒から数十軒の集落が必ずと言っていいほど形成されている。そうした風景からは川を源とする集落の成り立ちの物語、そして川に特化した暮らしの営みの歴史が今に引き継がれていることが実感される。一方で、河川の改修や堤防などの人工工作物の影響で川からよほど遠ざかっている集落も散見される。こうしたところには舟影は見えなかった。川には多面的な機能がある。だから川漁のような直接的な川との付き合い方だけではなく間接的な利用も含めその活用の仕方は様々だ。また、防災の観点から集落と川を分断する落差工や強固な堤防の構築などは必要不可欠なものなのであろう。しかしそれでもなお、舟から川岸の村々を眺めた時、筆者は川に隣接することで成立してきた流域集落の元々の暮らしの意味をもう一度考え直さざるを得ない。

帰りがけ雪の中を清川に下ってくる際、最上峡の沓喰にある最上川舟下りの通称「水上コンビニ」で休憩をとった。寒さでかじかんだ手にお店のおばちゃんたちの出してくれた温かいコーヒーがとてもありがたかった。最上川の魅力をそのままに生かして伝える産業があることは何とも心強く感じたのである。

一つ朗報がある。県内の大学の学生たちが今年木村さんのところで新たに舟を建造しようとしている。これまで最上川のことを筆者らと共に学んできた彼らが、いよいよ実践的

に川に向かい合おうとしている。こうした若い世代が、もう一度流域に暮らすことのもとの意味や成り立ちに関心を持って引き継ごうという動きがある。ここに流域の未来づくりのために大きな可能性があると感じている。流域の古老のみなさんにはぜひ川の知恵や技術、風習などをご教授いただきたい。次の時代にこそ必要なメッセージが皆さんの中に確実に息づいているのだから。